

繋げる、繋がる。

◆派遣参加に懸けた思い

「繋げる、繋がる」。2016年度に1年間の韓国留学を経験し、帰国後の大学生活最後の1年間をどう過ごすか考えて決めた私の2017年のテーマである。本事業を通して、韓国人青年や日本人青年の仲間と繋がるとともに、自分の手で日報を繋げたい。また、今回の事業を自分の未来に繋げたいと思い本事業に応募した。私にとって今回の韓国派遣は、日韓交流や留学等の活動をしてきた大学4年間の集大成という意味付けもあった。これまでに関わってきた地方の日韓交流事業と違い、年齢や地域、様々なバックグラウンドを持った青年が集まるということもあり、どんな新しい刺激を受けることができるのかと胸を躍らせて本番に挑んだ。

◆プログラムについて

ホームステイ

9月15日から17日の2泊3日間、私たち団員は2人組に分かれ、ソウル近郊の始興市でホームステイを経験した。私のホストファミリーは夫婦と高校生の息子、小学生の娘の4人家族の家庭だった。ホームステイ期間中には、始興市の観光名所に連れて行ってくれたり、韓国の伝統料理（チャプチュ、トッポギ、チヂミ等）を教わったりと様々な体験をさせていただいた。その中でも印象に残っているのは、近くの中学校のグラウンドで行われた地域の体育大会に行き、地域の方と一緒にご飯を食べながらお父さんが出場する試合の応援をしたことや、最終日の朝に近くの公園を散歩したことなど、韓国の家族の日常の一コマに入ったことである。旅行や留学の中では感じるものの出来なかった韓国の「家族」の生活に触れることができた。

また、中学生の時にもホームステイを何度か体験したのだが、その時には同年代の子供と遊ぶことが多かったため、今回のホームステイでホストファミリーのお母さんとゆっくり話せたことが非常に嬉しかった。ホームステイを受け入れようと思ったきっかけから始まり、結婚や育児、余暇時間の自分らしい使い方など、人生の先輩として私たちに正直に話してくださり、私たちの話も熱

心に聞いてくださった。このような時間を持つことができ、韓国語を勉強していて良かったと心から感じると同時に、自分の精神的な成長を感じることができた。

施設訪問（蔚山家庭型Weeセンター）

15日の韓国滞在の間、私たちは様々な施設を訪問したが、特に印象に残っているのが蔚山家庭型Weeセンターの訪問である。蔚山家庭型Weeセンターとは、家庭や学校において問題を抱える危機青少年の統合支援をする寄宿舎型の施設である。施設内には子供たちが生活するための空間だけでなく、音楽や美術等の活動を行うための教室も完備されていた。校内暴力やいじめといった問題は日韓が共に抱える社会問題であり、今回のセンターの訪問は日本での危機青少年への対応について顧みる機会にもなった。

蔚山家庭型Weeセンター以外にも派遣中の施設訪問、ディスカッションを通して、日本と韓国では、抱えている社会問題が類似しているということを再認識した。私は派遣に参加する直前に、山口県・九州地方と韓国の慶南地域の養護施設の子供たちが参加するキャンプに通訳ボランティアとして参加した。この事業は今年度で23年目となり、不安定な社会情勢の中でも1度も中止されることなく継続されてきたが、他の地域では似たような事業は少ないという。同じ社会問題を抱えているからこそ、日韓で意見を共有する場を設けることの意義は大きい。これまでの経験や今回の施設訪問を通して、単なる青少年同士の日韓交流だけではなく、各分野に特化した交流が重要視されるべきだと感じた。

韓国青年との交流

韓国外国語大学日本語学科や蔚山外国語高校の訪問、日韓青少年交流会への参加を通して私たちは多くの韓国青年と知り合った。彼らの日本語のレベルは様々であったが、どの青年からも日本を知りたいというアグレッシブさが感じられた。例えば、蔚山外国語高校を訪問した際には、短い休憩時間にも多くの学生が話しかけてくれた。覚えてたの日本語で言葉に詰まる場面がありながらも確実に気持ちを伝えようとする姿が印象的であった。また、日韓青少年交流会では、韓国青年全員が私たち一

人一人を温かく迎え入れてくれ、2泊3日間があったという間に過ぎてしまった。日韓青少年交流会に参加した青年のほとんどは今年度日本に派遣された派遣団員であったが、招へい時に比べ格段に日本語が上達した韓国青年もいたという。彼らの日本への関心の高さや、積極性に触れ、重要なのは言語ではなく交流したいという気持ちと実行に移す力であると再認識させられた。

◆派遣を通して学んだこと

集団の中での自分の役割

私が今回の派遣を通して学んだことは、集団においての自分の役割とすべき行動を常に意識することである。出発前研修や帰国後研修を含め約3週間、30人の団員と共に過ごす中で、意見や意識の食い違いもあり、個人の個性をいかしつつ、団として一つにまとめることの難しさを幾度となく感じた。もちろん、様々なバックグラウンドを持った団員が集まっているため考え方が全く同じということとはあり得ない。しかし、個人旅行ではなく、全員が日本代表青年として派遣されており、日本代表という自覚を持った振る舞い方や、団として目指す方向は同じであるはずだ。団員一人一人が団を構成する大切なピースであり、それぞれが団全体のために出来る事を見つけて行動することが重要であると強く感じた。私は日本紹介の動画作成や韓国語での挨拶等、自分の出来るタスクに対して積極的に手を上げるようにしていたが、特にAYLという立場として、もっと団全体のことを考えて行動できた場面があったのではないかとこの反省も残っている。今後の社会生活において、集団に属することが多くなるが、今回の派遣を通して学んだように、自分は今この集団の中で何をすべきなのか、何が出来るのかを常に意識して行動するようにしたい。

日韓交流において大切なこと

日韓青少年交流会で出会った韓国青年はプログラム終了後にも、ソウル都市ツアーや歓送晩餐会、ホテルや空港での見送りなど私たちとの交流の機会を積極的に作ってくれた。このように、一つ一つの出会いを大切につなげていくことが日韓交流において重要なことであると彼らから教わった。今回の派遣を含め、大学生活4年間で様々な日韓交流に参加し、また自分が日韓交流の場を創ってきた。その中で感じた日韓交流において最も大切なことは、日韓で大きな懸け橋を作るのではなく、小さくても簡単に解けることのない固い結び目をたくさん作るということである。橋を架けるには長い年月を要するかもしれないが、今回の派遣を通して私たちが私たちが手で直接結んだ結び目は解けることなく続いていくと確信している。

◆派遣を終えて

解団してから数週間経った今、私の中には二つの感情が混在している。一つ目は、私たち韓国派遣団を支えて下さった方々へ恩返しをしたいという感情である。内閣府や韓国の中央省庁にあたる女性家族部を始め非常に多くの機関や人々の支えによって本事業が成り立っているということをプログラム中にひしひしと感じ、私たちを支援してくださり、関わってくださった人々への感謝の気持ちをアクションとして示したいと思っている。具体的な行動としては、IYEOを通じた事後活動や、学内外での報告会である。地方からの本事業への参加はハードルが高いように感じられるが、地方の団員だからこそできることも多く、後輩にもぜひ本事業に挑戦してみてほしいため、今後は自身が企画運営する学内の韓国語コミュニティ等で積極的に活動報告や応募希望者へのサポートを行う予定である。二つ目の感情は、今回のプログラムを通して自分がどのように成長したのか、何が出来たのか、整理しきれないモヤモヤした感情である。漠然としたこの消化不良を解消するためにも、やはりこれからも国際交流活動に携わり続けるしかないのと思う。時間をかけながら自分なりの答えに出会えるように向き合っていきたい。このように、今回の派遣事業の参加で完結するのではなく、これからも活動を続けたい、続けなければならないと思ったことは自分の中で大きな収穫であり、最初に述べた「繋げる、繋がる」というテーマに相応しい活動であった。

終わりは始まり

私は、平成29年度日本・韓国青年親善交流事業に参加し、普段の生活からは想像のできないたくさんの方の出会いや貴重な経験を通して、多くの学びを得ることができた。韓国文化に関心を持っていた家族の影響で、私自身も韓国文化や韓国語に関心を持つようになり、それをきっかけに韓国語を専攻とする進学を選択し、大学1年次は3週間の短期留学、2年次には1年間の交換留学を経験した。もちろん、これらの留学でも数えられないほど多くの経験をし、学んだことも多かった。しかし、これは留学生という立場を通しての経験だけであるということに気づき、留学や旅行では経験できないことをしたいと考えていた。そのため、この事業を知り私がやりたいことだと思ったと同時に、いつもやりたいことがあっても内向的な性格が邪魔をして中々行動に移せない自分を変えるきっかけになるのではないかと考え、参加を決意した。この事業で得た体験や経験は一つ一つが貴重な思い出になったが、その中でも特に印象に残っていることを三つ述べようと思う。

一つ目は韓国での出会い・交流だ。本事業では、日本語を学ぶ青年のいる大学・高校への訪問及びディスカッションやホームステイ、学内暴力等の理由で学校に通うことができなくなってしまった学生を支援している蔚山家庭型Weeセンター、韓国青年の案内によるソウルツアー、そして韓国の青年と2泊3日の時間を共に過ごす日韓青少年交流会などがある。

どの交流も、この事業でしか経験できない貴重なものだが、その中でも特に印象に残っているものの一つに、始興市で行ったホームステイがある。私自身ホームステイという体験自体が初めてのものであったこともあり、ホストファミリーと団員全員で行った歓迎会では、すごく緊張したことを今でもはっきりと覚えている。ホームステイで私がお世話になった家庭は、小学生の息子さんと幼稚園に通う娘さんのいる4人家族で日本語が通じなかったのも、韓国語に自信のなかった私はコミュニケーションを上手くとれるか不安だったが、お母さんはゆっくりと分かりやすい表現で話をしてくれたり、お父さんの話す言葉が少し難しい表現の時は、簡単に分かりやすいものに言い換えてくれたりしながらの会話だったため、最初にあった不安もすぐに無くなった。お父さんは、私たちのために始興市の観光プランを計画してくれていて、団員の中で私たちが一番始興市を満喫したので

はないかと思ってしまうほど多くの観光スポットに連れて行ってくれた。また、夜には全員でアクセサリ作りをしてお母さんやお父さんからプレゼントしていただいたり、息子さんとお母さんと家庭用ポケットボールで対決したりと、長時間の外出が嘘かのように夜遅くまで交流を楽しんだ。2泊3日という時間は想像していたよりも遥かに早く過ぎて行き、あっという間にお別れの時がきた。とても寂しく、離れたくない気持ちが溢れるなかでお母さんが「これが終わりではないよ。これから会ったり連絡をとったりして繋がっていき」と言ってくれたのが、本当に嬉しかったと同時に私がこの家族とこうして出会えた縁をずっと大切にしていこうと思った。



ホストファミリーと一緒に昼食

また、二つ目は日韓文化交流会だ。最初は両国の青年とも緊張していたように感じたが、レクリエーションプログラムを通して、徐々に緊張はほぐれ、このプログラムで一気には距離が縮まったように思った。2日目のディスカッションでは多文化共生というテーマをもとに私たちのグループでは日韓の難民問題について意見を出し合った。ディスカッション自体もちろん貴重な経験になったのだが、私は、結果についての発表準備の時間が特に印象に残っている。各班で話し合った結果をまとめ、各自動画を作成するという発表方法だった。どのような動画にするのかは各班に委ねられていたため、自分たちが話し合った内容についていかに分かりやすく楽しく伝えるかということ、ディスカッションと同じくらいと言っても過言ではないほど話し合った結果、満足の

いく動画を作ることができた。また、その夜に行われた文化交流会では、両国の青年がそれぞれ練習してきた歌やダンスを披露し大変盛り上がった。この文化交流会では団員全員で練習したダンスや歌・日本の紹介動画にももちろん力を入れたが、私が思い深いのは有志で他の団員数人と作り上げたK-popのコピーダンスだ。先にも述べた通り私は非常に内向的な性格で、ダンスをすること自体も得意な方ではないが、それよりも人前で何かをすることが、とにかく苦手で、好きではなかった。今までに参加してきたいくつかの国際交流の場でもそれは変わらず、出し物があっても苦手だから参加しないと決め、多くの機会を無駄にしてきた。この有志のダンスにも参加するが非常に悩み、最初はいつものように不参加でいようと思ったが、そんな自分を変えたいと思っていて、やってみたいと思っていても行動に移せず後悔したことを思い出し、この事業では自分にできそうなことは全てやろう、積極的に行動しようと思いに誓い、有志のダンスへの参加を決意した。その結果、ダンス自体が上手くいったと胸を張って言えるわけではないが、有志に参加してよかったと胸を張って言うことができ、多少苦手意識があっても、自分から積極的に行動することが損になることはないのだと感じた。



日韓両国の青年で恋ダンスを披露する

三つ目は蔚山創業センターへの訪問と、希望製作所への訪問だ。

蔚山創業センターは、創業を考えている青年に対して、施設や設備、運営費などの支援を行うことによって、青年の創業を成功的なものにし、失業解消に貢献していくことを目的としている。ここでは、起業した数人の方からお話を聞くことができたのだが、どのお話もとても興味深いものであった。また、その商品からは蔚山への愛を強く感じる事ができた。アイデアを持っていたも自分たちの力だけで成功させることは非常に難しい

ことであり、このような団体が増えれば夢を持つ若者が活躍できる場が増えるのではないかと考えるととても魅力的な活動だと感じた。さらに、今回この場所を訪問できたことによって同じような団体が日本にはあるのか、どんな支援方法をとっているのかなど、日本の青年支援について調べるきっかけになった。

希望製作所は2006年に設立された、市民が社会デザインの担い手となることを目指す韓国随一のシンクタンクNPOである。地域活動の支援や市民社会作りの担い手の育成に取り組んでいて、〈市民のため〉ではなく〈市民と一緒に〉という理念のもと活動している市民参加型のシンクタンクだ。私はこの〈市民のため〉ではなく〈市民と一緒に〉作り上げるという考え方にとても魅力を感じた。設立の中心となっていた朴元淳さんがNPO業界からソウル特別市長になったことや、毎年安定した額の寄付金が集められているという点から、韓国のNPO団体への関心の高さを感じることができる。日本には、このような団体が少ないように感じ、今までは、私もあまり興味を持っていなかったが、蔚山創業センターの時と同じく、製作所を訪れたことをきっかけに日本のNPO団体の活動についても知りたいと思うようになった。

最後に、私は、事前研修を含めた約3か月間、この事業で多くのことに気づき自分の中に良い変化が生まれたと感じている。それは、自分の力だけで得たものではなく、韓国訪問中に訪れた多くの場所や人との出会いはもちろん、団長や副団長、渉外を含めた30人の団員がいたからこそ、得ることができたものだと思う。団員は出身地もやっていることもバラバラな30人であり、集団で生活していくというのも普段中々体験することができないのももちろん、このような機会がなければ出会うことすらないかもしれない。そう考えると、とても感慨深い。私はこの事業で得ただけでは終わらせたくない。事業に応募するときは参加をして終わりだと思っていたが、参加後その考えは変わった。ここで得たものは、次に繋げていくための手段にしたいと考えている。具体的なことはまだ自分でも見えていないが、まずは、日韓交流連絡会議に参加するなど、この事業に参加した先輩方や仲間たちとの縁を繋げていくことから始めようと思う。また、自分にとって大きな刺激となったこの事業について、もっと多くの人に知ってもらい応募するきっかけを作りたいと考えるため、報告会にも力を入れていきたい。

「近くて遠い」が「近くて近い」へ

私は今回、旅行や留学ではない“政府（内閣府）の事業”として得られるものがあることに期待し、本事業に応募した。私は、2年前の2015年2月～12月の約1年間、韓国・大邱広域市の慶北大学校への交換留学を経験した。大邱は2011年の世界陸上が開催された、韓国の中でも5本の指に入る大きな都市である。大学生活を通して日本文化発信に関心を持った私は、留学期間中は大学で語学や専攻科目を学ぶ傍ら、教育現場へ日本についての出張授業を行うインターンシップを行っていた。しかし、私は元々韓国に関心があったわけではなく、盲目的に「留学をしたい」という欲求と、海外で日本発信の活動をしてみたいという欲求から、偶然に近い形で韓国に辿り着いた。つまり、かつて私にとって韓国は「近くて遠い」国だったのである。1年間の留学を通して「お腹いっぱい」になるくらい韓国の魅力に触れ続けた私にとって、韓国は「近くて近い」第二の故郷と呼べる場所になっている。

しかし、留学終了後、あまりにも韓国に触れる機会がなく、すっかり「空腹」になっていた。ただ、1年間の留学で「お腹いっぱい」を体験してしまった私にとって、単なる旅行で韓国を訪れることは、少し物足りないと感じてしまう。そんな中、知り合いを通じて本事業を知り、留学や旅行では訪れられない場所への訪問や、本事業でしか得られない経験が叶うことに期待し、学生最後の夏を韓国で過ごすことを決意したのである。

本事業の個人目標について

私は現在、以下の3つの分野に強い関心がある。

- ① 教育（学校教育、キャリア教育）
- ② 仕事観（働き方、ワーク・ライフ・バランス）
- ③ 地方創生

本事業に参加するにあたって、韓国の様々な機関への訪問や、現地では会う人々との交流やディスカッションを通して、上記の分野について韓国の現状を知り、日本との共通点や違いを探ることを個人的な目標としていた。

実際に派遣中は高校や大学などの教育現場、政府機関である女性家族部、地域教育や起業家支援に取り組む機関など、旅行では決して訪問することのできない場所を訪問し、お話を伺うことができた。また、ホームステイでは実際にホストファミリーの家庭で2泊3日を家族の一員として過ごし、両親の仕事観や子育て観、子どもたちの日々の過ごし方や考え、教育の実態などに直接触れ

ることができた。知りたかったことを知り、様々な学びを得る中で、先述した目標とは逸れるものの、特に印象的だった出来事、そこから学んだことを紹介したい。



ホストファミリーとの登山の様子

真の日本発信とは？

派遣中、「真の日本発信（文化発信）とは何か」について深く考えさせられる印象的な出来事があった。蔚山外国語高校へ訪問した際の文化交流である。そこでは、まず生徒の代表によるピアノ演奏から始まり、続いて韓国の伝統音楽の演奏、韓国文化についての日本語による劇などを各学年の生徒たちが行ってくれた。全てにおいて非常に完成度が高く、多くの時間をかけて準備してくれたこと、また、我々日本青年を心から歓迎してくれていることが感じられ、とても胸が熱くなった感覚を今でも覚えている。

ではなぜ、私にとってこの経験が最も印象的だったのだろうか。それは、蔚山外国語高校の生徒たちの発表からは「なぜそれを韓国文化として伝えるのか」という意図や、「どうやって伝えるのか」という手段や方法について、生徒や先生の間で徹底的な議論が講じられたのだろうと、相当な努力が容易に想像できたからである。また、それだけでなく、「なんとしても日本青年に伝えたい」という情熱も感じられた。私は韓国に1年間留学した経験から、韓国文化について「それなりに」知っていると思う。しかし、生徒たちの文化発信は、初めて韓国文化に触れる団員だけでなく、過去の経験から既にある程度知っている団員にとっても、非常に心動かされるも

のだったと感じている。このことから、文化交流及び文化発信を実践する上で大切なものは何なのか、非常に考えさせられた。

我々日本青年も、初めて一堂に会した7月の事前研修から派遣に至るまで、日本紹介係を中心として派遣中に各訪問先で行う日本紹介のコンテンツを考えてきた。日本紹介係の尽力のおかげで、現地でも無事各訪問先で日本紹介を行うことができた。しかし、「日本代表」として文化交流や文化発信を実践する上で、「そもそも日本文化とは何なのか」について各々が解釈するための議論、そして「なぜそれを日本文化として紹介するのか」という理由を明らかにするための議論を踏まえる必要があったのではないかと感じている。単に日本で流行っているもの、日本で伝統的だと考えているものを“とりあえず”発信するという安易で画一的な思考に陥ってしまっ

てはいけな



文化交流会にて韓国青年と阿波踊りを踊る

リーダーとして、思いを共有するには

本事業で私は憎越ながら自ら立候補をし、参加青年を代表するYL（ユースリーダー）という役割を仰せつかった。事業参加当時私は23歳で、参加青年のちょうど

中間層に当たっていた。また、昨年度1年間大学を休学して半社会人を経験したことがあり、学生や社会人まで幅広い年齢の青年が所属するこの組織で、それぞれの立場を理解し、全体の雰囲気

を調整したり、緊く立場になりたいと考え行動をしていたつもりである。しかし、派遣の途中では疲労や慣れから怠慢な行動が目立ち始め、緊急で全体ミーティングを行った。しかし、チームの雰囲気を良くすることはできず、派遣中は大変苦悩した。団長や団員のおかげもあり、派遣後半には派遣団としての目標をもう一度見直し、なんとか良い雰囲気を取り戻すことができたものの、リーダーとして非常に多くの課題が残ったのが事実である。帰国後改めて、リーダーとして自分に特に何が不足していたのか今一度落ち着いて振り返ってみた。

私のこの事業や組織に対する思いは、「利他の精神」が足りていなかったように感じている。「3週間という時間を費やすからには、なんとしても多くの学びを得て帰らなければならない」と意気込んでいた分、自分のエゴの部分が大きく入ってしまっていたのであろう。また、帰国後、本事業の関係者の方から、「住んでいる場所、育った環境がばらばらなのだから、ある意味日本人との交流も異文化理解が必要だ」という言葉をいただき、今回の失敗からの学びがス通と腹落ちした。リーダーとして不足しているものが多く、周囲の方々に大いに迷惑をかけてしまったが、多くの素晴らしい機会をいただけたことに感謝し、今後に繋げたい。特に、帰国後に参加した国際青年交流会議の懇親会にて、韓国派遣団のリーダーとして皇太子殿下に帰国の報告をさせていただく機会を賜ったことは、一生の財産になると思う。これからも国際社会で生き、国際交流を続ける中で、将来的には日本人だけでなく様々な国籍の組織でリーダーとしてチームを率いてみたいと思っている。その瞬間が訪れるとき、何度も今回の派遣の経験を思い出すに違いない。



何度も助けられたAYL（アシスタントユースリーダー）の2人と

「近くて遠い」から「近くて近い」を目指して

韓国での長期留学を経験していた私にとって、正直に言うと今回の派遣ではカルチャーショックや、衝撃が走るような感動はなかった。各訪問先の方々との深いコミュニケーションによる学びや、韓国青年との本気のディスカッションを期待していた私にとっては、本事業のプログラムは正直少し物足りなかったと感じているのが本音である。

しかし、本事業の名称、そして、目的となっている“日韓親善交流”という面では、草の根レベルの交流だけでなく、2泊3日の交流などを通して「また会いたい」と思える韓国人の友人も増えたことから、概ね目的は達成できたと思っている。海外にまた帰ってこれる場所が増えたことは、この上ない喜びである。

また、本事業では、韓国について深く「知った」と言うよりも、知的好奇心を常に刺激され続け、「知りたい」と思うことがさらに増えたように思う。今回ホームステイで訪れた家庭や、交流した現地の方々、訪問した機関は韓国の全てではなく、ほんの一例に過ぎない。まずは一旦、「お腹いっぱい」になった本事業での学びを消化して、「空腹」に戻したいと思う。そしてまた、今回繋がった人々と「お腹いっぱい」になるまで腹を割って話したい。

今回の派遣で感じた韓国留学時の自分と今回の派遣での自分の変化は、日韓の「違い」よりも「見習いたい」という部分に目がいくようになった、ということである。恐らく、今回の事業参加を含めた継続的な国際交流が、文化の違いなどの心理的な「境界」を壊すことに繋がったのだと感じている。私はIYEOの一員としてこれから活動できることに非常に喜びを感じている。IYEOのように歴史があり、国際交流に関わり続けることができるコミュニティに所属できることは、とても光栄なこ



国際青年交流会議の懇親会後に撮影した全体写真

とだと思っている。コミュニティを通して拓がるこれからの出会いに大いに期待している。

日韓関係、とりわけ日韓の政府と政府の関係は、まだ友好な関係であるとは到底言えないだろう。しかし、本事業のような継続的な日韓交流の積み重ねが、我々の世代が国を牽引する立場になったときには大きく花開き、日本と韓国が「地理的にも心的にも近い国」になっていることを信じて止まない。

最後に、本事業の関わる全ての方々に感謝いたします。ありがとうございました。

感謝を胸に

私が本事業に応募した理由は、韓国が好きで韓国のことをもっと知りたと思ったからだ。大学で韓国語の授業も履修しており、韓国への留学も考えているが、本事業では留学や旅行では経験できない様々なプログラムがあり、とても興味が湧いた。また、将来韓国と関係のある仕事に就きたいと思っているので、そのヒントを見つけるきっかけになればと思っていた。そして本事業は事後活動があるのが魅力的だと感じた。派遣が終わればすべて終わりではなく、連絡会議やIYEOの活動を通して派遣で知り合った人々や他国の人々とも交流できることが楽しみであった。今回の派遣では本当に様々なことを学び、たくさんの人との出逢いがあった。その中でも特に印象に残った出来事が三つある。

一つ目はホームステイである。ホームステイはプログラムの中で一番楽しみにしていたことで、実際に自分の目で見て体験することによって、韓国人の日常生活を知り、日本との違いも発見したいと期待に胸を膨らませていた。韓国では高層のアパートがずらりと建ち並んでいて、一軒家に住んでいるイメージがあまりなかった。以前、韓国に旅行に行ったときに、韓国のアパートには日本のようなベランダがなく、一面ガラス張りのアパートが多く見受けられたため、洗濯物はどこに干すのだろうかという疑問があり、部屋の構造も気になっていた。

ホストファミリーの家族構成は、お父さん、お母さん、そして中学1年生と小学5年生の息子2人。お父さんが少し日本語を話せたので日本語と韓国語を交えながら会話した。これまでも外国人のホームステイを受け入れてきたようであったが、女性を受け入れるのは初めてであったので息子2人は緊張している様子だった。家(アパートであった)の中を全室見せてくださったが、想像していたよりも広く、壁紙がおしゃれでとても綺麗だった。そして気になっていたベランダはガラス張りの内側にあった。日本のマンションと似ていると感じたが、トイレとバスルームの間に仕切りがないことには驚いた。そこに文化の違いを感じた。

ホームステイ1日目は夕食を食べに行く前に次男が指をけがしていたので私たちも整形外科について行った。その病院はビルの一階にあって外から見ると、中が暗くてとても病院のように見えなかった。しかし、ドアを開けると明るくて、日本の病院とあまり違いがないような普通の病院があり不思議に感じた。韓国でなかなか病院に行くことはないので、貴重な経験になった。2日目

は始興市中央図書館に行った。韓国の図書館も日本のように本がたくさん並んでいてそれを読むスペースが少しあるようなイメージだったから、なぜ図書館に行くのだろうと思っていた。しかし、実際に行ってみると驚くことがたくさんあった。日本の図書館に比べて学習スペースが圧倒的に多く、空いている席がほとんどないくらい学生が熱心に勉強していた。教室のような学習スペースもあり勉強に集中できる環境が整っていた。地下には食堂があり大人から子供までたくさんの人がそこで食事をとっていた。映像授業を見ている学生も多く、韓国の学生の勉強への意識の高さや学歴社会の一面を目の当たりにすることができた。その他にも、家庭菜園を見せてくださったり、近所の祭りに行ったり、キンパブ作りもした。

ホームステイでは、ホストファミリーの温かさをずっと感じていた。韓国語をゆっくり話してくださったり、時にはお父さんが日本語に通訳してくださった。そしていつも私たちが疲れてないか、心配して気にかけてくださった。息子さんとは毎朝外で遊んだりしていくうちに段々と仲良くなれた。私たちのことを“スナ(お姉さん)”と呼んでくれたことがとても嬉しかったし、改めて血縁関係がない親しい人“お兄さん”“お姉さん”と呼ぶ韓国の慣習がいいなと感じた。お母さんが「今度韓国に来たら一緒にブルコギを食べに行こう」と何度も言ってくださったり、韓国にも家族ができて嬉しかった。いつか一緒にブルコギを食べに行ける日を楽しみにしている。

二つ目は日韓交流青少年交流会(つどい)である。



ホストファミリーと一緒に